

クルト・マイスナーの『四国奇談実説 古狸合戦』

～その背景と意義～

依岡隆児

Kurt Meißners „Der Krieg der alten Dachse“

—über seinen Hintergrund und Sinn—

Ryuji YORIOKA

Abstract

Dieser Aufsatz behandelt Kurt Meißners „Seltsame Geschichte aus Shikoku. Der Krieg der alten Dachse“ (1932). Der deutsche Übersetzer dieser typisch japanischen Überlieferung, Kurt Meißner, war im ersten Weltkrieg als Kriegsgefangener in Bando, Shikoku interniert und arbeitete danach lange in Tokyo. Er hatte sich für die ‚Tanuki (Dachse)‘ interessiert, über die er damals viel von den Bewohnern der Region um Bando gehört hatte.

Hier will ich den Hintergrund und Sinn dieses Werks betrachten, besonders seine volkskundlichen und lokalen Gesichtspunkte.

はじめに

東アジア原産という狸は、中国では「狐狸」といわれ狐と混同されてきたが、日本では狸伝説は狐と袂を分かち、独特の発展を遂げた。¹ とりわけ四国は狐を駆逐し、昔から狸が縄張りとしてきた地域である。なかでも阿波・徳島には狸伝説がよく残され、独特の展開を遂げている。風俗に溶け込み、現在では町おこしやイベントに利用されることもある。

狸は人を騙したり真似たりして、文明にゲリラ的に抵抗してきた。しかし狐のように冷徹でなく、野趣あふれどことなくユーモアがある。憎めない愛嬌と旺盛な好奇心、それに土地に根差した素朴さ、そうした古きよき日本人の雰囲気を体現している。それを、笠井新也は「口碑的情調」と呼んだ。² この笠井の労作『阿波の狸の話』は、徳島での郷土研究の一環として聞き伝えの「狸の話」を大正から昭和にかけて採取したものだった。こうした地元における狸伝説の継承のおかげもあって、当地では現代でも「狸」は人びとの想像力と郷愁を掻き立ててやまないのである。

外国人にも徳島の狸伝説のファンが現れた。地域主義でグリム・メルヒェンの国ドイツの人はとりわけ、こうしたローカルな話に心惹かれるのだろう。板東俘虜収容所で日本通で知られたクルト・マイスナーが1932年に、神田伯龍の講談『四国奇談実説 古狸合戦』³ (1910年)をドイツ語訳している(Kurt Meißner (übersetzt): *Seltame Geschichte aus Shikoku. Der Krieg der alten Dachse. Eine wahrheitsgetreue Überlieferung.*⁴ (1932))。その序には、収容所時代に近所の農民たちから聞いた狸伝説を好きになったことが翻訳のきっかけだったとある。また本の扉には「われ知るなかで最も偉大なるいたずら狸たる、愛する妻

¹ 参考、今泉忠明『狐狸学入門』講談社、1994年。中村禎里『狸とその世界』朝日新聞社、1990年。

² 笠井新也『阿波の狸の物語』中央公論新社、2009年、4頁(初出は、郷土研究社、1927年)

³ 神田伯龍(丸山平次郎速記)『四国奇談実説 古狸合戦』中川玉成堂、1910年

⁴ Kurt Meißner (übersetzt): *Seltame Geschichte aus Shikoku. Der Krieg der alten Dachse. Eine wahrheitsgetreue Überlieferung. Mündlich vorgetragen von Kanda Hakuryu, einem berufsmässigen Erzähler von Helden- und dergl. Geschichten.* Tokyo 1932. 以下KDと略す。

に捧ぐ」と掲げている。この本自体が日本の地域文化への関心とユーモア、そしてなにより「狸」への愛情にあふれたものになっている。

本稿は、この「狸」伝説のマイスナーによるきわめてユニークな翻訳本の背景を明らかにし、その地域民俗に対する関心や「グローバル」な視点といった現代的意義を考察しようとするものである。

1. クルト・マイスナー

板東俘虜収容所にいたドイツ人のいく人かは第一次世界大戦後も日本に残り、日独文化交流に貢献した。なかでも、戦前から日本にいて、戦時中は「日語通」（通訳）として活躍、戦後も日本に残り、会社経営のかたわら日独交流に大きな足跡を残したのが、クルト・マイスナー（Kurt Meißner, 1885-1974）である。

マルクス『資本論』を出版したことで知られるハンブルクの出版業者オットー・マイスナーの孫だった。福音派で、ハンザ都市における進歩的な人々との交流の中で育っており、異文化に対するとらわれない感覚を持っていた。ユダヤ人の友人についての言及もあり、リベラルな考え方をしていたことが推測される。⁵ 二十歳で来日、横浜のジーモン・エーファース機工商会の駐在員となり、1907年からその系列である東京の「ライボルト社」に移った。1914年ドイツ軍人として応召。第三海兵大隊第六中隊配属となったが、捕虜となり松山へ、その後板東へ移管された。収容所内では通訳をする。解放後、日本でライボルト商会支配人、機工貿易会社社長を務める。後に日本のドイツ東洋文化研究協会会長に就任、日本文化の紹介者ともなった。1955年、ハンブルク大学から名誉博士号を授与された。『滞日六十年』『日本におけるドイツ人の歴史』『横浜のドイツ人』『日本のドイツ文化』などの著作がある。

引退後はハンブルクに帰り、「ハンブルク・バンドー会」の世話役も務める。スイス・ロカルノにあった別荘は「七夕荘」と称したが、その日本庭園には狸の大きな焼き物があったという。⁶ マイスナーは六

⁵ Kurt und Hanni Meißner: Sechzig Jahre in Japan. Lebenserinnerungen von Kurt und Hanni Meißner. Hamburg 1973, S. 182-S. 184. 以下、SJと略す。

⁶ 中里信一「板東人、クルト・マイスナー覚書」、愛知学院大学『教養部紀要』第54巻第4号、43頁。佐藤林平「日本の紹介者クルト・マイスナー〔含年譜・著作目録〕」、慶応義塾大学経済学部『日吉論

十年間、日本で過ごして後、ハンブルクで亡くなった。

また 1973 年の自伝『滞日六十年』は妻との共作となっていること、『四国奇談実説 古狸合戦』でクルトが妻ハンニーに献辞を捧げていたことから、彼が愛妻家だったことが知れる。この妻も陽気で積極的な面を持つ、社交的な人だったようだ。

この『滞日六十年～マイスナー夫妻の回想』は自伝であるが、ここにもマイスナーの板東収容所時代のことが書かれている。1917 年に松山から板東に移った彼は、ここでは「収容所を保養所のようにすることができた」(SJ, S. 85)と述べている。所長の松江大佐が「寛大な人間」であったため、彼は「五人の精神障害者を出すくらいなら、百人の酔っ払いの方がいい！」(SJ, S. 85)と述べて、松山では禁じられていたビールを飲むことを捕虜たちに許した。マイスナーは収容所での娯楽として「クシギ」でヨットをしたことも思い出している。「クシギ」は現在の鳴門市北灘櫛木のことで、播磨灘に面している。「忘れがたいほど美しい海岸の内陸海」で、「海はガラスのようで、少し中に入るだけで 5 メートルに達した。女たちが魚を売っていた。私たちはその魚をすぐに浜で調理して食べた」(SJ, S. 85)と回想している。収容所での「余暇」は「有効に使うことができた」ばかりか、「そのあまりやりすぎて暇がないくらい」だった。(SJ, S. 86) 地元の人々との交流にも通訳として立ち会っている。ドイツ人コックが日本の婦人にジャガイモ料理を教え、捕虜の中の学者が経済の講演会を開き、二人の園芸家は日本人の農夫にトマト栽培を伝授している。そのおかげで「この地は今日(1973 年時点一筆者注)では日本で最大のトマト産地である」。(SJ, S. 86)とはいえ、マイスナーは日本語通訳として収容所で大活躍だったはずだが、その割には収容所時代の記述は以上述べた程度で、少ない。四国の印象もあまり述べていない。

ただ、後に徳島の古狸の合戦についての伝説の翻訳を出しているように、この時代、彼は四国の民俗や文化に関心を抱いていた。『滞日六十年』にも収容所時代に「徳島の古狸の合戦の伝説をドイツ語に翻訳した」とある。(SJ, S. 85)

一方、第一次世界大戦時のドイツ人板東俘虜収容所において発刊され

た新聞『ディ・バラック』には、彼の四国についての記述が多くある。四国や地元の徳島の風俗や文化について興味深い記事を残している。『ディ・バラック』の第2巻（鳴門市、2001年）⁷ における1918年3月31日27号では、「展覧会の日本人観客」の記事をマイスナーが書いている。ドイツ人たちが日本人をどう見ていたかが知れて興味深い。日本人がやってきて大盛況だった収容所の展覧会についての記述である。マイスナーは日本通らしく、日本についてたくさんの本が書かれてきたが、それらは世界旅行のついでに立ち寄っただけの日本の印象を個人的な感情で書いたものが多く、「滑稽だが、根絶できないおとぎ話」（『バラック』、6頁）を作り出したと、批判している。松山収容所から来た彼は、「田舎臭い住民の来観を覚悟」した（『バラック』、6頁）とし、松山ならもっと「進んだ」観客がくるだろうとして、とんちんかんな質問をする客や、出兵する戦士に妻がキスをするシーンを描いた絵を見て笑い出す客のことを書いている。また、日本人一般の誉め言葉は真に受ける必要はないと述べている。（『バラック』、7頁）日本通としてのプライドが高い、シニカルなものの見方とユーモアのセンスのある人物だったことが、推測される。

1918年5月12日31号では、「阿波の国の4月」というエッセイをマイスナーが書いている。地域の民衆・風俗に対する観察力と愛着をうかがい知ることができる。ドイツでは日本では「花は匂わず鳥は歌わず」と聞いていたのに、それはでっち上げで、ここではヒバリは歌っているとしている。（『バラック』、120頁）田んぼで4歳の子どもが「オハヨー」とか「マスキー」（ドイツ人が教えた中国語）と声をかけてきたので、彼が「グー・テン・ター・ク」と答えると、顔を輝かせたという。（『バラック』、122頁）

1918年6月9日37号にはやはりマイスナーによる「四国霊場八十八箇所への巡礼」がある。彼の地域文化への関心の高さがうかがえる。巡礼の由来・風習や弘法大師のことなどについて説明し、四国地図や絵を載せている。地元の文化や歴史に関心を持ち始めていることが知れる。霊場巡りについて行き、「四つの国」について見聞したい、そうすれば、魂の救いと、足腰の鍛錬になるだろうとも述べている。（『バラック』、

⁷ 『ディ・バラック』第2巻、鳴門市、鳴門市ドイツ館史料研究会訳、2001年。以下、『バラック』と略す。

198 頁)

なお、第 4 巻第 2 分冊の 1919 年 6 月号⁸には、マイスナーの「ためき物語」が掲載されている。これは『古狸合戦』の「訳者の前書き」と重なる部分もある。日本および徳島の狸伝承についての民俗学的報告となっている。

また捕虜仲間から「七夕」のことを質問されたことをきっかけに「七夕祭」について『万葉集』や『古今集』も調べ始め、とうとう『星の祭り、七夕』という本を実家の出版社から出している。⁹ このように、マイスナーは長い滞日歴を有する親日家であり、批判的な観察力のある、民俗・風物への関心も強い人だった。第一次世界大戦時における板東時代にも徳島や四国の民間伝承に関心を示していた。なかでも「狸」は彼のお気に入りとなっていたようである。彼はやがて「狸」伝説の翻訳刊行を手掛けることとなる。

2. 『四国奇談実説 古狸合戦』翻訳本成立の背景と成立、ならびに「訳者の前書き」の翻訳

発行元は教文館（東京・銀座）と Verlag Asia Major G.m.b.H. (Leipzig) であるが、もともとは日本国内の出版社から日本関係のドイツ人に向けて出されたものである。特にドイツ東洋文化研究協会（OAG）議長に就任した際の記念という意味で刊行したと、本人は述べている。

神田伯龍の講談を翻訳し、短く再話したものだ。『四国奇談実説 古狸合戦』は続編の 2 巻（『津田浦大決戦』『日開野弔合戦』）と併せて 3 巻本で出版されていた。原本の『四国奇談実説 古狸合戦』の「序」によると、もともとは徳島の藤井楠太郎が狸伝説の原稿を大阪の中川玉成堂にもちこんだのだという。これを伯龍が講談に仕立て、丸山平次郎が速記したのである。

マイスナーは翻訳にあたってこの 3 巻をかなり省略して、一冊の本にまとめている。省略した部分はドイツ人読者にはあまり縁のない歴史や、

⁸ 『ディ・バラック』第 4 巻第 2 分冊、鳴門市、鳴門市ドイツ館史料研究会誌、2007 年。

⁹ Kurt Meißner: Tanabata. Das Sternfest. Hamburg (Otto Meißner Verlag) 1923.

本筋とはたいして関わらない会話部分やエピソードであることが多い。また注も付けている。掲載された写真は原本の伯龍の本の口絵はそのまま利用しているほか、自分が所蔵していた絵葉書を掲載している。こうした注や写真の活用からは日本の民俗・文化を正確に伝え、関心を喚起したいという意図がうかがえる。徳島県立図書館蔵の本には「長井巫歴山寄贈」とある。長井長義の息子で日独交流を促進していた人物である。またマイスナー直筆で徳島県立図書館へ献本する旨の文がドイツ語と日本語で書かれている。長井が仲介して、マイスナーの本を図書館に寄贈したのであろう。

また、訳者の「前書き」には「『四国奇談実説 古狸合戦』に登場する狸」として、登場する狸たちの相関関係を表にし狸の名前の日独対応も表に書きこんでいるが(KD, S. ix-x)、これは原本にはないものである。原本にある徳島の地図に両陣営の勢力図が書き込まれている図は、丹念にドイツ語で手書きして書き直している。翻訳にあたって、狸の名前もドイツ語に訳しているが、かなり意識である。たとえば日開野の染屋大和屋に住み込み、その守り神となった「金長」は「Goldherr」と文字通り訳したかとおもうと、四国の狸の領袖だった津田浦の六右衛門は「Maximus」と、名前ではなくその地位を呼び名にしている。禿狸は「Achthaar」としているが、これは Hage が「八毛」であるという説を受けたものであるとして、「禿狸」の言い方もあると注を付けている。

章は「1. Abend」「2. Abend」…、すなわち、「第1夜」「第2夜」…という形式にしている。伯龍の本では単に「第1回」「第2回」とされていたが、これは講談が連続して夜になされていたために、マイスナーがわざわざそのようにアレンジしたものである。第2巻、第3巻は大幅に省略しているが、第2巻第1夜の訳者注でそのことをことわっている。(KD, S. 51)以下簡略化するのは、伯龍の講談が繰り返しが多いためである。それは30日間、連続で毎夜なされるので、客が何回か抜けてもわかるように配慮したためであるので、ここでは省略するのだとしている。また長い会話も避けている。第2巻、第3巻は西洋でいう「英雄・騎士物語」Helden- und Rittergeschichte となっているが、こうした話は日本の庶民の間では人気があったとする。また注に収容所時代に徳島市にある「新八 Neuacht」狸の墓を実際に訪れたと記している。(KD, S. 90)

以下、参考までに「訳者の前書き」を訳しておく。

訳者の前書き

私がなぜこの物語をこうして翻訳したのかと、皆さんは疑問に思われることでしょう。それにはこう、お答えします。これは大きな島である四国で最も知られた民間伝承だからだと。あるいは、それが典型的な日本の英雄物語だからだと。しかしそう言ったのでは、正直とはいえません。本当の理由はこうです、私は日本の狸とその物語、そう、この日本のユーモアの最も美しい産物、を愛する者だからなのです。

20年前私は麻布の丘の上に住んでいました。そこからは遠く目黒を望むことができました。とある晩秋の夜、月が澄んでいて辺りが寝静まるころ、私は突然遠くで太鼓を叩いているような音が聞こえたような気がしました。こんな夜にそのような音がどこから聞こえてくるんだろう？使用人たちは顔を見合わせて、こうささやいていました、「狸だな！」「狸の腹太鼓だよ！」

テケテンテン テケテン テケテン

ドコドン ドコドン ドコドン

と調子のいい拍子で近づいてくるかと思うと、突如間近で聞こえ、そうかと思うとまた突然はるか遠ざかっていく。ひょっとしてそれは遠くの村で仮装舞踏会の練習をしている農夫に過ぎなかったのかもしれないし、あるいは風が吹いてあちこちで音を立てていただけなのかもしれない。一また、ひょっとして狸信仰は本当だったのかもしれない。その信仰は多くの日本人の心に今日になっても、これほどまでにしっかりと根を張っているのです。

後に、四国という島で戦争捕虜として5年間過ごさなくてはならなかったとき、私は付き添っていた巡査と一緒に作業をした農民たちからたくさん狸物語を聞きました。収容所のすぐ近くにはつい最近まで一匹の古狸が松の巨木の下に巣くっていました。その狸は「御隠居」と呼ばれていて、人々にお金を貸し、農民たちが返済期限を守れないときにだけ、悪さをするのでした。

概して、狸のいたずらというのは悪質なものではありません。地元生まれの巡査の一人が私に話してくれた話では、この土地での狸のいたずらは主として人間の真似をするということにすぎません。どこかで葬式があると、次の夜には狸たちが墓に現れ、葬式の儀式の真似をしたのです。彼らはちょうちんを提げていて、それを揺らしながら奇妙なお芝居を演じていました。鉄道が開通したときにも、すぐに狸たちがこの最新

の交通機関でいたずらをしました。阿波だけでなく八王子でも、こうしたお話を聞いたことがあります。「当時は、鉄道がものめずらしかったのです。鉄道が通り過ぎると、人々はその珍しいものを見ようと集まってきたものです。そのころ何度かあったことですが、晩方になって、突然笛が響き、機関車の明かりがひらめき、ゴトゴトと列車が近づいてくるように思えたので、近くに行ってみると、なにも見えなかったのです。たそがれどきの目の錯覚だ！狸のいたずらだ！などと言ったものです」。あるいはまた、対向する列車に向かって機関車が走ってくるのがあった。突然明かりがきらめき、機関車が大声で近づいてくる！あわや衝突、というとき突如、なにも見えなくなる。翌朝になると大狸が轢かれて死んでいました！

また、狸たちはいずれにせよ反文明的で、それゆえ今日ではますます姿を現さなくなっています。昔から彼らはさびしい場所を好むようになっていました。古いお寺や境内、不気味なさびしい穴倉がいつも彼らのお気に入りの場所でした。寂蓮法師にこんな詩がありましたので、友人のコーナーにドイツ語にしてもらいました。

「深い森にむした

人里はなれて静かなお寺

人っ子ひとりいない

鐘の音ひとつ聞こえぬところに

狸が棲みつき

愉快なはずら三昧

その辺の、どこか

遠くの方を通りがかると、聞こえるだろう、かすかで押し殺したよ
うな

あの奇妙で陽気なすさまじい太鼓の音が—

きっと聞こえるだろう—それがどこから聞こえてくるのかは、知らないけれど」

自分のおなかを叩くというのは、悪いことを意味するというわけでは決してありません。調子の悪い人間が、おなかを叩いたりなどするでしょうか。空腹で空っぽの胃を叩いても、音が出るわけもないでしょう。なんの憂いも苦労もなく満腹であるとき初めて、腹鼓でも打とうかと思うもの。日本では古来、よく治められた民族の喜びを、世界平和を、すべての階級の人々の平和で憂いのない平穏さを、腹を叩くというイメー

ジによって表してきたのです。だから、日本人がこの習慣をなくしてしまうようなことがなければ、すぐにまた私たち皆が腹鼓を打ちたい気になる時代がやって来ることでしょう。

狸物語といえばライネケ狐を思い浮かべるのではないのでしょうか？日本の狸は、しかし狐とはまったく関係がありません。むしろ狐とは逆なのです。狐は愛欲を掻き立てる姿に化けます。たとえば美しい娘とか、売春婦とか、きれいな若者とかに。狸はこれとはまったく異なり、ひょうきんなものに姿を変えます。狸は猿とかお坊さんとか、農民とか丁稚とかの姿をして現れます。日本の狐の昔話はすべて中国発祥ですが、狸物語は今日のような形としては日本独自のもので、中国の狸物語とはその性質をまったく異にしているのです。狐というのはたいてい恐ろしい、不気味な輩ですが、狸はそのおどけた性格からして古来大変愛されてきました。狐は稲の神（稲荷）の従者として神道に属するが、狸はいつもお寺を好み、よくお坊さんに化けます。狐は美しい女性の姿に化けますが、狸はおどけてむさくるしい、多くは男性の姿に化けます。しばしば、八畳もあろうかというものすごい陰囊をぶらさげて姿をあらします。狸の伝承はコミカルなのですが、それも狸の男性的性質ゆえんなのです。

『古狸合戦』では愉快な狸のいたずらがいくつも語られています。今日でもあちこちのお寺に生きていて、人びとがそのお寺にたくさんのお供え物をもってきます。狸寺のなかでも一番有名なのはおそらく徳島市にある妙長寺近くの「お六つ庵」でしょう。もちろん、表だってはここに狸が祀られているなんてことにはなってはおりませんが、現に向かいの二軒の店は信者に狸の好物である油で揚げたお菓子（油揚げ）を売って生計を立てています。また夏の夕方には夜になるまで何百、何千の商人や相場師、芸者、生徒たちがやってきてお金やよい稼ぎ、恋愛成就、幸運を祈って、狸に油揚げと賽銭を捧げるのです。近所の人びとによると、年平均では一日 800 枚の油揚げが供されていて、賽銭は讃岐の金毘羅にも引けをとらぬとのこと。『阿波の狸』の本に出ている「お六つ庵」の写真をみると、華やかな建築物が狸のために作られていることがわかります。ところが、日本、とりわけ阿波にはさらに何百という大小のお寺が狸の伝承に結びついているか、狸を祀っているのです。

残念ながら、狸にも災難がふりかかってくるのが、しばしばあります。『古狸合戦』をお読みなされた皆さんは哀れな狸「芝右衛門」の悲劇的な死に同情されることでしょう。また窓から将棋を見ていたがとうと

う人間の仲間入りをすることにして、一緒に将棋をするなんていう狸の話も哀れです。その狸は部屋にはいったとき、叩き殺されます。というのも興奮していたのでそいつはうっかり化けるのを忘れていたからです。人間がこうした愉快で気のいい動物に対してこんなにも残酷であるというのは、残念なことです。そればかりか、狸汁にして食べる人もいます。とても脂っぽくて全然おいしくないというのに、です。ご婦人方にもお願いします、どうか狸の毛皮をお召しになどなさいませんように。

もちろん、狸自身にもいかに狸の責任はあります。狸は戯れやいたずらをするをやめることができません。ときには冗談を解さない輩もからかったりします。滑稽なのは、狸がドイツ語や英語の辞書を編纂する学者たちにことごとくいたずらを働いたということです。どの辞書にも、「狸は Dachs (アナグマ) である」とか「狸とは badger (アナグマ) である」と出ている。しかし本当はアナグマなどではなく、自然科学的にはかぎ爪をした犬の一種、もしくは「Marderhund (いたちの一種)」と言うべきなのです。しかし、ご存じのように、この動物ときたら、いたずらせずにはいられないという代物です。そういうわけで、おそらくその名をまんまと「アナグマ」ということになってしまったのでしょう。この呼び方が狸の気に触るといふのなら、これ幸い、こっちらも愛すべき狸にいたずらを仕掛けて、『古狸合戦』でもそのように呼ぶことにいたしましょう。

25 年前ドイツ東洋文化研究協会に入会した当時では、今でも懐かしいルート・レーマンが会長でした。彼は毎年毎年議長に選出されるとき、ボーマルンダー (ウォッカの一種—訳者注) をふるまうというのを慣例としていました。今、私が久々にまた議長に選出されるにあたり、どのような賄賂を使ったものかと随分と頭を悩ませました。ボーマルンダーはもはや東京では手に入りません。そこで思いついたのが、友人たちに『古狸合戦』を本にして贈ることでした。私のコレクションからとった古版画や根付けのいくつかで飾っています。この小本が我が愛する狸のために新しいファンを増やすことになれば、幸いです。

東京、大井町、1932 年 3 月

訳者

このようにマイスナーの「前書き」には、この物語を取り上げた理由

として、「これは大きな島である四国で最も知られた民間伝承だからだと。あるいは、それが典型的な日本の英雄物語だからだと。しかしそう言ったのでは、正直とはいえません。本当の理由はこうです、私は日本の狸とその物語、そう、この日本のユーモアの最も美しい産物、を愛する者だからだと」(KD, S. i)と述べている。翻訳する理由は「狸」への個人的思い入れがかなり強かったためだということのである。

20年前に麻布で狸の腹鼓を聞いたことを、まず回想する。彼は1932年時点から20年前には東京・麻布に住んでいたとあるが、刊行当時は東京の大井金子町にあった自ら設計した西洋風の家に住んでいた。

次に、板東収容所時代の思い出に触れる。5年間四国の収容所にいたとき、お巡りさんや農民からたくさんの狸の話聞いた。収容所近くの松の木にも狸が棲んでいた。狸のいたずらは悪質ではなく、人のマネをするだけだとして、葬式、列車のエピソードを紹介している。狸は反文明的で、今日ではそれ故ますます姿を見せなくなったとして、現代における狸についても考察する。

「友人のボーナー」とは、ヘルマン・ボーナーのことである。彼は板東俘虜収容所にいたドイツ人で、マイスナーの信頼が厚かった。戦後も日本に残り、大阪外国語学校(大阪外国語大学)に勤めた。もともとは中国研究をしていたが、日本研究者となって研究書を多数出している。マイスナーは彼に寂蓮法師(1139-1202、歌人で『新古今和歌集』の撰者)の詩を翻訳してもらったのである。

マイスナーは狸が平和のシンボルである、という見解を示し、日本の当時の政治情勢への憂慮もうかがわせる。腹鼓は腹がへってはいできない。それゆえそれは満ち足りた平和と平穏さを表す。日本人がこの風習をなくさなければ、やがて腹鼓を打つ気分になる時代が来るだろうとして、日本の平和を願っている。

狸といえば、ドイツではライネケ狐を思い出すとして、狸の比較文化的考察が始まる。(KD, S. iii) 狐は女性的、性的イメージが強く、神道に受容され、その伝承はすべて中国からのものだ。それに対して狸の話は日本オリジナルで、狸は男性的で、滑稽にして愛される存在である。仏教的であり、坊主に化けたりもする、と解説している。

また、資料として『阿波の狸』から「お六つ庵」の写真を取ったとある(「前書き」KD, S. iv~v)が、これは笠井新也『阿波の狸の話』(郷土研究社、1927年)のことである。この本の口絵にあった「徳島

市 お六つ大明神」の写真のことを指している。これは妙長寺の傍にある。マイスナーはその写真を翻訳本の口絵として転載しているのである。そのほかの写真や絵は彼自身が所蔵していた絵葉書や根付けである。

「私のコレクションからとった古版画や根付け」(KD, S. vi) というのは、マイスナーがコレクション癖から集めたものである。『滞日六十年』には、七夕関係や狸関係、機織り機、刷りものといったコレクションを持っていたと述べている。(SJ, S.256-259) なお、狸コレクションについては、狸の木版画はさすがにご婦人方に見せるわけにはいかないものが描かれていて男の友人たちにしか見せられなかったので、木版画のコレクションはやめて、狸の根付けだけを集めるようになったと述べている。(SJ, S.257 f.)

残念ながら狸はいじめられている。女性のみなさん、くれぐれも狸の毛皮なんてお召しにならないように(KD, S. v)、と言うところには、ユーモアがある。「狸汁」については、脂っぽくておいしくないというのは、よく言われていて、この汁が美味であるというのは、一般には狸ではなくアナグマのものと間違われたからとされている。

またさらに、「狸」の訳の問題を取り上げている。「『狸は Dachs (アナグマ) である』とか『狸とは badger (アナグマ) である』と出ている。しかし本当はアナグマなどではなく、むしろかぎ爪をした犬の一種、もしくは『Marderhund (いたちの一種)』と言うべきなのです」(KD, S. v) と述べて、狸は厳密には Dachs ではない、「かぎ爪を持つ犬」Schleichkatzenhund である、としている。ちなみに、今泉忠明も狸はドイツ語では Marderhund としているが、英語では badger ではなく、raccoon dog としている。¹⁰ここではあえて Dachs と呼んで、狸たちにいたずら仕返してやろうと、マイスナーらしく一ひねりを利かせているのである。

ドイツ東洋文化研究協会の議長選出のための「賄賂」として刊行するという刊行意図の理由説明(KD, S. vi)も、なかなか粋である。「ドイツ東洋文化研究協会 die Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens は 1873 年に在日ドイツ人の集いとして始まった協会で、ドイツと日本の学術・文化交流に貢献した。OAG と略されて呼ばれる。「ルート・レーマン」はその OAG の会長を務め、1913 年か 14 年に東京で

¹⁰ 今泉、前掲書、134 頁

亡くなっているルドルフ・レーマンのことである。マイスナーは来日以来このレーマンと親交があった。(SJ, S.33) 「ポーマルンダー」とは、ウォッカの一種で、ハーブとスパイスで香りをつけたジャガイモの蒸留酒である。1932年当時にはもう日本では手に入らなくなったというところに、軍国主義化していく状況をうかがわせる。マイスナーは OAG の会長を 18 年間務めている。

3. 意義、考察

大正時代にドイツ人が四国・徳島という日本の一地域の民俗・伝説に関心を抱き、翻訳までしていたのには驚かされる。このマイスナーの地域民衆に対する愛着はおそらくドイツ本国における民俗・風習への愛着から来ているのだろう。ドイツ自体が地域主義の国であり、地域の文化を大切にしてきた国である。『グリム童話』にみるように、その土地土地の民間伝承や伝説を収集し、それを民族の核となるものとみなしてきた伝統がある。第一義的には、地域文化への愛着が彼にこうした作品刊行を思いつかせたと推測される。

彼の著作に「寄席」や落語、「日本の機織り」についての紹介記事や『七夕』についての本がある。(SJ, S.267 f.) それにはまた、マイスナー自身の性格も与って力があっただろう。温厚でウィットに富み、社交的だったと思われるマイスナーは、狸伝承にも自然と親近感を抱き、これを是非ともドイツ人たちにも話して聞かせたいと思うようになったに違いない。

ドイツの民俗学 *Volkskunde* の流れがこれに影響をした可能性もある。¹¹ ちょうど大正から昭和にかけて、日本でもこうしたドイツの民俗学が移入され、その流れをくんで、柳田国男らが提唱した「郷土研究」が地方でも展開されていたというのも、興味深い符合である。

また、この狸合戦の伝説は、一種の合戦物である。西洋中世における英雄・騎士道物語の伝統と重なる部分が多々あり、物語自体はたとえ舞台が日本で登場人物が狸であったとしても、ドイツ本国でももっと広まっていれば読まれていたはずだ。これは基本的な合戦物のスタイルを踏

¹¹ 参考、拙著「日本の近代とハイマート（郷土/故郷）概念」、鈴木貞美・劉建輝編『東アジア近代における概念と知の再編成』国際日本文化研究センター、2010年

襲していたため、ドイツ人には意外にすんなりと読めたのではないだろうか。

マイスナーの思想性についても一言。北ドイツのハンザ都市生まれで、もともと進歩的、自由主義的だった。日本が軍国主義に染まる時代にあっても会社の部下や友人にユダヤ人がいたことを後の回想録で述べている。(SJ, S.172) この自伝によれば、マイスナーはナチスには懐疑的だった。OAG 会長や会社経営の立場上、当時は慎重に行動せざるをえなかったが (SJ, S.184)、本来は平和を愛し、友人と家族を思いやる人だったとされる。ただし、この「自伝」は戦後に書かれているので、彼のナチスとの関係についての真偽のほどは、これだけでは定かではない。

『古狸合戦』の本の献辞は「われ知るなかで最も偉大なるいたずら狸たる、愛する妻に捧ぐ」とあるが、妻ハンニーはマイスナーが 1922 年から 23 年に一時帰国していたときに知り合ったザクセンのフランケンベルク出身の女性である。結婚して日本に連れ帰ったときには、すでに妊娠していた。彼女は好奇心が旺盛で、陽気で社交的な、いたずら好きの女性だった。また彼女はユーモアとバランスのとれたセンスを持っていた。『滞日六十年』にあるエピソードに、東京神田のプールに娘のインゲと行ったとき、日本人女性の財布がなくなり、娘が疑われ、不快な思いをした話がある。家に帰ってその夜、ハンニーはそのプールに大柄な日本人の生徒がいたことを思い出し、その子が犯人だったのだと思い当たる。ところが一週間してプールに行くと皆が彼女らに謝る。財布はトイレに置き忘れていたのだ。(SJ, S.150) この話でハンニーは、異国で泥棒に疑われたことで自分が逆に何の関係もない日本の子供を疑ったということをおざわざ明らかにして、自分自身の中にもある差別意識を自覚していることを示している。こうしたバランスのとれた異文化へのセンスは、夫クルトが愛するものだったに違いない。一方、妻ハンニーは「オカミサン (小神さん)」とあだ名されていた夫のクルトについては、どちらかというところ「落ち着いていて、物思いにひたるが、仕事はきちんと仕切る」と評している。(SJ, S.120) この自伝においてもクルトの文章もユーモアがあるが、ハンニーの書いた箇所は具体的で生き生きしている。夫以上に、妻ハンニーはいたずら好きで、陽気で奔放な性格であったようだ。クルトはそういう妻をこよなく愛する人だったのである。

おわりに

昭和初期にドイツ人が「狸」についての本を出したということ自体が、すではほえましくさせる。第一次世界大戦後に今や東京を中心に活躍しているドイツ人が、かつて3年間に不自由な身とはいえ模範収容所と称された四国の収容所で地元民との交流も持ちながら過ごした。この徳島・板東のことに思いをはせて、彼は狸伝説の翻訳刊行に取り組んだのである。そのドイツ人が日本の土地土地の地域性に強く惹かれる人であったためだ。またそれと同時に、近代化の末に軍国主義に向かいつつあった中央集権的な近代日本への懐疑の念があったことも推測される。彼は狸の腹鼓を、腹が満たされたときにしかできないことだとして、「平和」のシンボルとみなしていた。軍国主義化していく1932年当時の日本へのマイスナーなりの危惧と、平和への思いを感じ取ることもできよう。

また、地域の信仰や風俗にいまだに郷愁の念を禁じえない日本の庶民たちと、そうした土着のものへ愛着を持つ外国人の心的交流を想像することもできる。異人としての視点が土地に根差したより普遍的な地域文化のあり方に共感し、その時代の中央集権的で軍国主義的な日本をひっくり返して見せる。そうした「グローカル」な視点すら感じ取ることができるのである。日本が地域主義へ舵を切ろうとしている現在、こうした外国人による地域文化の紹介は、日本人自身に地元の文化を「グローカル」な観点から再発見させる契機ともなるのではないだろうか。